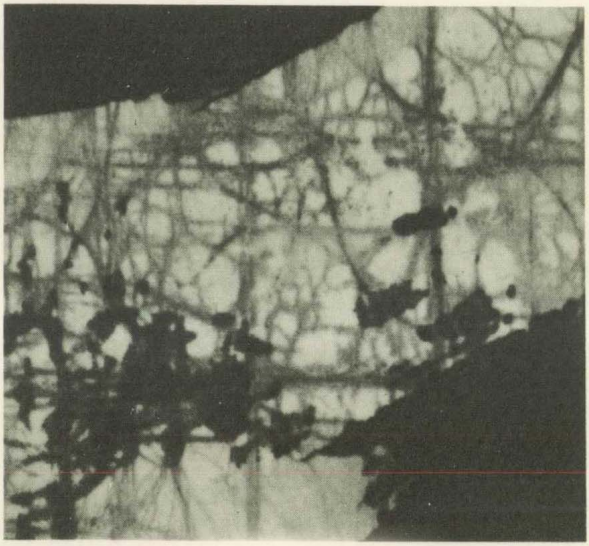

貴船山心中

昭和四十七年一月二十日　第一刷発行

著者＝加堂秀三

発行者＝野間省一

発行所＝株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二

電話＝東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

振替＝東京三九三〇

印刷所＝豊国印刷株式会社

製本所＝有限会社文信社

定価＝七〇〇円　落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

© 加堂秀三　昭和四十七年　Printed in Japan

0093-125266-2253（0）　（文1）

目次

緑雨奇譚……5
黒土曼陀羅……37
貴船山心中……73
紹介パーティ……137
呪縛残照図……177
町の底……211

装幀　水木　連

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

貴
船
山
心
中

緑雨奇譚

1

宿の裏道は途中からゴミ捨て場になっていた。紙コップが散らばっている。ゴムホースがある。電球、綿、鶏の足といったものも落ちていた。ハエが飛びたつ。臭気が鼻をついた。

その坂道を、哲夫が無言で降りて行く。圭子の手を強く握り、大股に歩いていく。圭子は口がきけなかった。

哲夫は愛情をわからせようとするらしく、手になお力をこめた。しかし圭子はあまりにきつく摑まれすぎていて、握り返すことができなかった。すると、いきなり引き寄せられた。そして顔に息のかかる近さから見つめられ、

「けい。好きだ。どうしていいかわからない。もう死んでしまいたいよ」

圭子はその言葉で突きのめされたように感じた。婚約旅行にきているのだから互に好き合っていて不思議はない。そして人は誰でも形容に詰まるほどの気持を現わしたいとき、「死ぬほど」とか「死んでしまいたいほど」とかいいたがる。哲夫の言葉もそれと思えばよかっ

た。が、圭子は気持がくぐもっていく。彼の濃い眉や、稚い甘い目もとが不吉に見えた。

その圭子に哲夫が言葉を継ぎ、

「けいをもっと上手に愛せるものはほかにもいるかも知れない。けいをもっと幸福にできる男もいるかも知れない。しかしぼくほどけいを必要としているものはいない」といった。

必要の大きさで誰にも負けない。オレはけいが少し怖い気もする。同い年なのに年上の女のように思える。けいは美しすぎるし、重すぎる。大きすぎる。深くて、見定められない。しかしぼくはけいを引き受けて行きたい。どこまで行けるかわからない。途中で破滅してしまうかも知れない。それでもいい。

「現実に、君がいま目の前にいる。その君よりほかに、オレ、これといって打ち込む価値のあるものが思いうかばない」彼は自身のことをぼくといったりオレといったりして話し続けた。

ワイシャツの襟が白かった。ボタンが二つ開いている。そこから勁い、しかし線のやわらかな頸と胸の一部が覗いている。その目の前の均整のいい体は男っぽく、それでいて甘い匂いのようなものがあった。

圭子はもっと喜んでいいはずだった。しかし気持が沈んでいく。愛される嬉しい。愛する人を持つことはもっと嬉しかった。ただ、その愛し方があまりに激しくなることは危険だと考える。ほどほどに愛するのがいいとは勿論思わなかった。そんなことができるとも思わないが、圭子には人を愛しすぎて薬を嚥んだ過去があった。圭子を愛するあまり廃人同様

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

になり、やがて自ら命を断った学生もある。その大学へ入ってから続けさまに起った恋愛事件が、圭子に真剣すぎる愛情の恐ろしさを教えている。圭子は、震える声で愛を告白する哲夫を愛しいよりは疎しく思った。

圭子が長井哲夫と婚約する気になったのは、彼なら愛情の度合いを示すのに死を持ちだしたりしないと考えたからで、熱愛されたいためではなかった。二十二歳という年齢も圭子を安心させた。彼はよく辛かった少年時代の話をする。圭子が聞いていて耳をおおいたくなるようなこともいう。が、どれほど酷薄な体験談をするときでも、哲夫の表情には若者らしいある柔らかさがあった。一時期圭子が関りを持っていた遠山という初老の男のような剝き出しの残忍性は探しても見あたらない。圭子は婚約を決意する前に思った。わたしは激しすぎる愛情には懲りている。しかし、かつて遠山がそうしたように、わたしを完全な性の道具として扱う男の手つきにも耐えられない。長井哲夫はその両方に合格している——。

それなのに、哲夫は婚約旅行へきたとたんに、死と愛情とを結びつけるようなことをいい始めている。圭子は彼の言葉をそらせる意味で、

「あら、綺麗」と、いま二人が降りてきた道が崖にのぞんでいる、その土手の花を指さしていった。

いってから、ドキッとした。

土手いちめんに咲き乱れている花は少しも美しくなかった。蛇苺の花かも知れない。小粒で、地に這うように咲いてい、黄色が強すぎた。曇っているのに眩しい陽を受け、毒どくし

く見える。レンゲも咲いていた。枯れた萩の根元から柔らかそうな芽が吹きでている。ススキも、ヨモギもあった。しかし圧倒的に黄色い小粒な花の勢いが強い。そこを、ほとんど紫色にちかい小さな蝶が飛んでいた。圭子は地面に群らがり生えている草や花に魅入られたようになった。動けない気がする。そしてそう思って見ると、一メートルほどに伸びた藤の蔓が恐ろしかった。蔓先を気味わるくもたげている。先の方が黒く、全体に毛が密生していた。いまにも動きだしそうに見える。思わず目をそらせた。するとズボンの筋をくっきりと立てた、そのズボンの布地ごしにも肉の隆起のわかる哲夫の太腿が見えた。

2

圭子が最初に濃い緑の草や木を疎(うとま)しく思ったのは大学二年になった年の五月で、そのとき彼女は土浦の家へ帰っていた。ある夜不意に家の戸をたたきそのまま何日も東京へ戻らなかった。娘の帰宅を喜んでいた父が、心配顔をしはじめた。母がときどき伺うように娘を見た。しかし圭子は、「ほら、いつか話した五月危機というのね。あれらしいの。気が重くて体がだるい。でも、みんなかかるらしいから心配しないで」そういって澄していた。少くとも、澄していようとした。

が、そのうち演技を続けようとする意志すら欠落して行った。暗い顔のまま茶の間へ行き、庭へも出る。これではすべてをさとられてしまうと思う。しかし、どうすることもできなかった。夜も眠れない。眠ると奇怪な動物に脅(おびやか)された。呻き声をあげる。母が障子をあ

けて入ってくる。そして、「さあ、子供を殺そうね」といったりした。圭子が拒むと母はみるみる化物に変っていく。化物は朝まで圭子を苦しめつづけた。

それほど、奥村茂信が圭子の体に宿した小さな生きものは彼女の生活を暗くした。日に日に圭子を内側から食べていく。体だけでなく心も喰い破って行った。

圭子はそれまで大学の寮で、男に捨てられた友達を何人も見た。いまにも死にそうな様子をしている。それがおかしかった。哀れで仕方がない。わたしなら、こうはならないと思った。日記にも書き人にもいったのを覚えている。が、土浦で圭子はその自分が信じられなかった。行ってしまった奥村のことばかり考える。そして不意に泣きだすかと思うと、「わたしの体には赤ちゃんがいるの！　どう、偉いでしょう」そう誰かれなく吹聴して歩きたくなったりして困った。

そんなある日、圭子は子供の始末を考えるために裏山へ行った。

陽ざしが強かった。五月のものとは思えないほど強い。その陽ざしを受けて、栗、うるし、樫などの木々が重なり合い、せめぎ合うようにして繁っていた。みな強い緑の葉をつけている。それに藤蔓が巻きついていた。息ぐるしいほど若葉の匂いがする。圭子は圧倒された。そして、初めて生い繁った木々の緑を疎しく思った。

少女時代から五月はさわやかな季節、若葉は美しいものと教えられ、そう信じてきた。それへの反省の気持がうごく。同時に圭子は奥村茂信とのことも、「彼にだけ罪があるのではないかも知れない」と思った。

奥村は圭子の高校の先輩で、圭子が三年生になって間もなく、卒業生名簿の編集に学校へきた。そのとき彼は既に大学生で、だから恋は彼の方から仕かけた。何も記憶に残るようなことをいったりしたわけではない。しかしそれから二年間、彼は恋に未経験な圭子を、いわば好き勝手に操った。いろいろな愛の言葉が囁かれた。性についての進んだ考えも話された。が、あとで思うと結局奥村は彼がそうしたいときに圭子に口づけをし、圭子の服を脱がせた。それはいなめない。けれどもその接吻を教えられ、性の喜びを少しずつ覚えさせられて行った圭子にも、ちょうど目の前の濃すぎる緑のような疎しい生命力があったに違いない、圭子はそう思った。

風が出てきた。木々がなまなましい白い葉裏を見せる。葉ずれの音をさせ、大胆に、みだらに重なり合う。枝と枝が深く交わされた。重なり合ったまま倒れる。圭子はその撓やかさに舌を巻いた。

「こんなふうに、喜びだけ追求して生きることもできるのだ」ふとそんなことを思った。

しかしその夜彼女は薬を嚥んだ。日が暮れると急に温度のさがった日で、「寒いな寒いな」と思って薬を掌にのせたのを覚えている。誰かが障子を勢いよくあけた。そして何か叫びはじめた。が、そのとき彼女は土浦へ帰ってからすっかり馴染みになった化物に、心も体も宰領されていた。

どれくらいかたった。圭子は化物にグロテスクな姿勢に体を押し開かれたまま、意識が戻った。部屋に姉と弟がいた。この姉弟も化物に変るのではないかと心が怯える。そのとき、

「少し空気を入れかえようか」という母の声がして障子が開いた。

圭子は姉弟が化物に変ることより細く開いた障子の隙間から見える庭の緑が怖かった。緑は白い障子紙にも薄く、青い影のように映っていた。

圭子が死のうとしてから四ヵ月目に、こんどは清水正明が自殺をした。

圭子は短い間だが金を取らない娼婦のような生活をしていたことがある。それは体の回復を待って土浦から東京へ戻ったころで、彼女は男子の学生から誘われると断らなかった。映画へでも酒場へでもついて行く。そして男が偶然を装い、体へ手を触れてきても怒らなかった。すると、男は圭子の心を見ぬいた。学生運動の闘士でも学生俳優でも、男の頭の切れぐあいや気力とは無関係に、彼らはきっと圭子の無気力を見ぬいた。十人が十人とも見ぬいた。そしてムキになって圭子に酒を飲ませたり急に黙りこくったりしてから、圭子を暗い場所へ連れて行った。そこで抱きすくめられ唇を押しつけられる。それから旅館や男の部屋へ連れて行かれた。圭子はそのどの瞬間にもされるままになっていた。清水正明が近づいてきたのはそんなときで、圭子は彼にもほかの学生たちに対するのと同じことをした。つまり、自分からは何一つ相手に働きかけない代り、相手の命じるままに動いた。

それを清水正明は誤解した。

圭子が受身なのは優しい性格のためで、従順なのは彼を愛しているからだと思った。そして、そのことをしどろもどろの話し方で圭子に伝えた。

圭子は驚いた。というより大儀な気がした。しかしそれも無気力から、ほんとうはこうなのだということを彼に教えなかった。ただ彼ががむしゃらな仕方で圭子を求めてくる、それにはずっと応じていた。正明は、「けい。好きだ。死んでしまいたいくらいだ」と、裸の圭子を抱きしめながら口走るようになった。

そのときでも、圭子は自分のほんとうの気持を彼に話さなかった。正明はまだ大学生になったばかりで圭子以外の異性を知らない。初めて女を知って、夢中になっているのだと思った。むろん「死んでしまいたいくらい」という彼の言葉も聞き流した。そして、正明以外の学生との交渉も続けていた。誘われると拒まない。そのなかには遠山浩之のような初老の男もいた。

遠山は圭子の姉婿の叔父で、圭子が大学へ入るとき、そこから通学しないかという話があった。提案者の姉によると遠山の家にも三人の子供がいた。しかしいまはみな独立して、遠山は広い家で妻と二人淋しく暮している。それで前まえから誰か親類の息子か娘かに部屋を提供したいといっていた。むろん遠山はいまも農薬会社へ勤めていて、生活には困っていない。だから部屋代が目あてなのではないということだった。しかし場所が市川で、圭子の大学のある三鷹までは遠かった。それに圭子は遠山家を訪ねたとき、その陰気な大きな家が好きになれなかった。痩せた神経質そうな遠山の妻も、脂ぎった小男の遠山も偽善者の貌(かお)をしていた。圭子は、あんな家へ一人で下宿したりしたら夜中に食べられてしまうと姉にいい、結局寮へ入った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com